



日本列島の東北地方と九州地方における後期旧石器時代石器群編年と比較研究 地域性成立の解明

著者	柳田 俊雄
号	27
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文第292号
URL	http://hdl.handle.net/10097/63778

博士論文要旨

日本列島の東北地方と九州地方における後期旧石器時代石器群編年と比較研究 —地域性成立の解明—

柳田俊雄

本論では東北地方と九州地方で確認されたA Tや「暗色帯」・「黒色帯」を共時的な層とみなして、それらを基準に両地域の編年の構築と比較検討し、日本列島の地域性の成立について考察した。以下のような章立で本論をすすめた。

第1章では東北地方南部に位置する福島県を会津地方、中通り地方、浜通りの地域に分け、当地域の「黄褐色土」、「暗色帯」、「A Tテフラ」を基準に後期旧石器時代の石器群を整理した。筆者の調査した会津笹山原A遺跡、西会津町山本遺跡、須賀川市乙字ヶ滝遺跡、石川町背戸B遺跡を中心に当地域の後期旧石器時代の石器群の編年案を提示した。

第2章では奥羽山脈西側に位置する山形県最上川、梵字川、秋田県雄物川、米代川の流域ごとに後期旧石器時代石器群を取りあげた。ここでは福島県下で「暗色帯」に対応する層と考えられた「くすんだ層」や「A Tテフラ」を基準に石器群の層位的な関係を整理し、当地域の後期旧石器時代石器群の編年案を提示した。

第3章では奥羽山脈東側にある、岩手県北上川中流域、その支流の和賀川・胆沢川流域、宮城県名取川流域の後期旧石器時代石器群を取りあげた。岩手県下の層位的に重層する石器群や福島県下で「暗色帯」に対応する層と考えられた「くすんだ層」やA Tを基準にして当地域の後期旧石器時代石器群の編年構築案を提示した。

第4章では奥羽山脈東・西側地域で発見された「黄褐色土」、「褐色土」中にみられた「くすんだ層」や「暗色帯」に対応する層、さらには「A Tテフラ」が北東北地方に発見できなかったので青森県外ヶ浜町大平山元遺跡の調査成果を紹介し、この地域で層位的に確認された事例から後期旧石器時代終末期の様相について整理した。

第5章では第1～4章で考察した結果に基づいて東北地方の旧石器時代石器群編年試案を提出した。後期旧石器時代を第1・2・3a・3b期・4期を設定し、当地方の旧石器時代編年を示した。ここでは広域テフラでの「A Tテフラ」、「暗色帯」、宮城・岩手県下の地元産出のテフラやスコリア層等を活用し、層序の整理と石器群の対比をおこなうことにした。また、従来、加藤稔によって提示されたナイフ形石器の型式やそれに共伴する器種の組み合わせ等についても再整理し、新たに石器群総体とする編年試案を構築した。

第6章では、大分県豊後大野市に所在する岩戸遺跡出土資料を中心に九州地方の後期旧石器時代の編年研究をすすめた。第1節では九州地方の旧石器時代研究史をまとめた。第2節では岩戸第I文化層の石器類を中心に整理し、その分析と編年的位置づけをおこなった。「黒色帯」とA Tを活用し、それらを基準に層位的にまとめた。第3節では岩戸遺跡では複数の石器文化層が層位的に発見されたが、そこに石刃技法の存在も看取できた。ここでは各文化層の石刃技法を分析し、その技術的な共通性や相違性を明らかにし、東九州の石刃技法の変遷観を示した。第4節では岩戸第I文化層の石器群に瀬戸内技法が存在する

ことからその技術的な特徴について明らかにする。第5節では第2・3次調査で確認された岩戸第Ⅰ文化層の上位で発見された石器群のナイフ形石器の形態に注目し、これらを九州地方の西北部・東部を中心とした資料群と比較しながら後期旧石器時代終末期のナイフ形石器の形態的特徴について考察した。第6節では岩戸遺跡の資料群を基準に新資料の増加と研究の進展が著しい近年の九州地方旧石器時代編年研究の再評価をおこなった。

第7章では九州地方の後期旧石器時代を第1・2・3a・3b・4期に設定し、当地方の後期旧石器時代編年を構築した。

第8章では日本列島の本州島の北部に位置する東北地方と九州地方の後期旧石器時代の石器群を比較検討した。両地方の「暗色帯」、「黒色帯」、始良T_n火山灰(AT)を基準に両地方で設定した第1～4期の石器群を整理し、その類似性と相違性について考察した。

終章では日本列島内の東北地方と九州地方の旧石器時代の編年を素描し、筆者は両地域に共通した三つ変動期がみられるものの、第二変動期に石器製作技術上の地域的な違いが現れると指摘した。一つは石器組成やナイフ形石器の形態であり、いま一つは石刃技法の調整技術上に違いがあったとした。

以上、両地方の後期旧石器時代第2期のAT降下直下に発達する「暗色帯」や「黒色帯」の層中で石器製作技術上の相違がみられることから、この時期を日本列島内で地域性が成立したと考えた。

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	柳田 俊雄
論文審査担当者	(主査) 教授 阿子島 香 教授 柳原 敏昭 准教授 鹿又 喜隆
論 文 名	日本列島の東北地方と九州地方における後期旧石器時代石器群編年と比較研究―地域性成立の解明―
<p>本論文は、日本列島の後期旧石器時代において、地域的な多様性が出現する時期および石器文化に表れる具体的な地域性の内容について、九州地方と東北地方を比較することにより解明したものである。論文全体は、序章、終章を含む10章から構成される。</p> <p>序章では、研究の目的と方法について論じる。両地域に認められる「暗色帯」・「黒色帯」および始良 Tn 火山灰を共時的な層と捉えて、比較研究の枠組みを整理する。第1章では、東北地方南部の層位的編年について考察する。福島県笹山原A遺跡、乙字ヶ滝遺跡、背戸B遺跡、山本遺跡などの論者自身の発掘調査に基づく石器分析など、後期旧石器時代の石器群変遷について実証的に論じる。第2章では、東北地方西部の層位的編年について考察する。論者も共同発掘者であった山形県上ミ野A遺跡を始め、山形・秋田両県の遺跡の層位と石器群などについて整理し、「暗色帯」を基準とする編年案を示す。第3章では、東北地方東部の編年研究について述べ、名取川流域や北上川流域の遺跡を中心に、層位と石器内容を考察する。第4章では、東北地方北部の後期旧石器時代終末期について、青森県大平山元遺跡群の石器を論じる。第5章では、東北地方全体について、「暗色帯」と始良 Tn 火山灰に対する各石器群の出土位置を詳細に検討し、総合的な編年案を提示する。第6章では、九州地方東部の石器群について考察し、論者自身の分析による大分県岩戸遺跡の調査成果など詳細な検討を行ない、層位的編年を構築する。第7章では、九州地方全体の後期旧石器時代の編年をまとめる。そして第8章において、東北地方と九州地方の両地域の石器群変遷について、実証的な比較研究を行う。</p> <p>「暗色帯」・「黒色帯」の下位出土の石器群には共通性がみられ、刃部磨製を含む斧形石器、台形様石器、粗雑なナイフ形石器などを組成する。「暗色帯」・「黒色帯」中から地域性が出現し、その上位において東北地方と九州地方の相違は顕著となる。前者では、素材製作のための「石刃技法」が発達し、頁岩の石材原産地と結びつく。ナイフ形石器、エンド・スクレイパー、彫刻刀などに特徴的な型式がある。九州では、石刃技法の調整技術が未発達で、多様な剥片生産技術による、台形石器、切出形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器などがある。終章では、以上の結果をまとめ、後期旧石器時代を通じて、三つの大きな変動期があったことを論じる。</p> <p>本論文の結論は、論者の長年のフィールドワークに基づくものであり、離れた両地域において比較基準となる層位的な事実を見出し、石器群の型式学および技術的分析により編年を行なったもので、非常に実証的で説得力に富む。当該時代の日本列島の二地域の石器文化について、総合的な変遷を提示したものといえ、その成果は斯学の発展に寄与するところ多大なるものがある。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	